

福岡県におけるコシヒカリの栽培技術の実態

柴田義弘・真鍋尚義・大隈光善 (福岡県農業総合試験場)

Yoshihiro SIBATA, Hisayoshi MANABE and Mitsuyoshi OKUMA : Cultivation Practice of Rice Variety 'KOSHIHIKARI' in Fukuoka Prefecture

最近の良食味米指向に伴い、実需者側の県内産コシヒカリの生産拡大に対する要望は非常に強いものがある。福岡県としても、作付の拡大を図ってはいるものの、二毛作体系への導入の困難性、および倒伏しやすく栽培が難しい等の問題点により、現在の県内における作付面積は1985年で229haと少なく、面積拡大も進んでいない現状にある。

そこで本試験では、現場におけるコシヒカリ栽培技術の実態をつかみ、栽培上の問題点を作出し、生産拡大を図る上での資料とするために、調査を行った。

1. 調査方法

資料として、県内20カ所の早場米生産団地におけるコシヒカリ栽培技術実証圃の3カ年(1983~1985年)の調査データを用いた。同一地域で複数の試験区を設置している場合が多いので、調査点数は3カ年で延べ178事例である。

ここでは調査データの中から、収量および収量関連形質と移植時期との関係、ならびに移植時期別のN施用量と収量との関係について報告する。

2. 結果および考察

移植時期と収量との関係を見ると、従来からいわれているとおり、早植するほど多収となっており(第1図)特に551kg/10a以上の多収事例は、いずれも5月1~20日に移植したものであった。

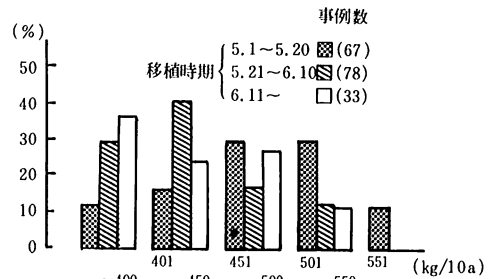
移植時期別の生育は、5月1~20日移植の場合は、穂数が多く(第2図)稈長が短く、倒伏程度が比較的小さかった。5月21日~6月10日移植の場合、穂数が少なく稈長が長く倒伏程度も大きい場合が多かったが、これは中干し時期が梅雨期にあたるため十分な水管理ができ難いこと等が関与しているものと考えられる。6月11日以降移植の場合は、栄養生長期が短いため生育量が少なくなり減収する傾向であった。

次に、移植時期別のN施用量と収量との関係を見ると早植ほどN施用量が多くなっている傾向にあるが、5月1~10日移植の場合でも、N施用量8~10kg/10a前後のところに最多収事例があり、それ以上増施しても必ずしも収量は上がっていない。また、同一施肥レベルでも収量差が大きいが、これは施肥量の他に水管理や地力等の他の要因が関与しているためであり、これらの点についてはさらに検討する必要がある。6月1~10日移植の場合、前に示したように、稈長が伸び倒伏しやすいため、N施用量は従来の基準よりやや少ない6~7kg/10a程度の場合で多収を示し、これより増施した場合、倒伏により

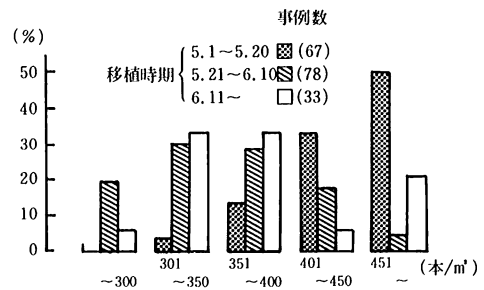
収量は低下する傾向がみられた(データ略)。

以上の結果から、極早生種のコシヒカリを暖地の福岡県で栽培する場合、従来言われているとおり、5月上旬頃の早植が有利であることが明らかになった。しかし、実際は5月下旬~6月上旬頃に移植されている事例も多く、この時期に移植する場合には、前述したように稈長が伸び倒伏しやすい傾向にあるため、収量目標をやや下げ、それに合わせN施用量をひかえ、適切な肥培管理を行うことが安定栽培の要点であると考えられる。

今後に残された問題としては、栽培の集団化を進め、地域ぐるみで適期移植を行い、水管理その他の肥培管理を適切に実施していくことが大切であると考えられる。



第1図 移植時期別の収量の度数分布



第2図 移植時期別の穂数の度数分布